熊野の森から

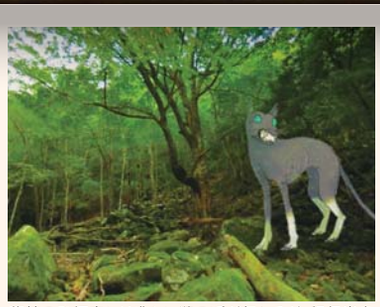
怪しの熊野

「龍神村の怪異（其の二）」

其の六十四

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

旧・龍神村の最奥にある大熊の殿垣内には、狼（オオカミ）の悲しい話が伝わる。ある腕の良い猟師が狼の子らがじゃれているのを見つけ「一匹くれへんか」と言ったところ、母狼は一匹を残して去った。育てて猟に使うと、単独で山へ行っては獲物を追い込んでくるため、猟師は河原で待って撃つだけでよかった。ある時、狼に「千匹の獲物をもってきたら命をやる」と言ってしまった。三年もたたないうちに九百を超え、怖くなって和尚に相談したところ「狼は絶対に約束を守るから必ず殺される。お前と同じ格好のわら人形を作り、狼が山へ千匹目を追いに入ったら、河原へ人形を立て、杉の木に登って鉄砲をかまえて待て。千匹目を殺した時には人形に飛びかかるから、一発でしとめろ」と言われた。猟師は、言われるがままに一発で狼を撃ち殺した。狼は約束を守ったわけで、猟師は自分の身勝手を反省し、亡きがらを埋め、小さな祠（ほこら）を建てて供養した。そこは、狼神社として今もまつられている。



龍神の殿垣内には悲しい狼の話が伝わるが、紀伊半島の山中には数々の狼にまつわる話が伝わる。（イラストはBoBo）

龍神には「水ひょろ」の悲しい母と娘の話も伝わる。ある時、体の弱い母が熱を出して寝込んでしまい、何日も熱が続いたため、娘は谷川に水をくみに行った。すると、水面に赤い着物を着た美しい女の姿を見かける。あまりにも美しいので時がたつのも忘れて見とれてしまい、日暮れが近くなった頃、その姿が水に映った自分の姿だと気付く。あわてて水をくんで家に戻ったところ、母の命は尽きていた。娘は悲しんで、何日も泣いて、いつしか鳥になってしまった。その鳥は、今でも暑い夏の日に「水ほしい、ミズヒョロロー」と鳴くという。この鳥は、赤い色、その声、夏に鳴くという特徴から、カワセミの一種で夏鳥のアカショウビンのことだろう。

虎ヶ峰ではノーツチというツチノコが出没するという。虎ヶ峰からの眺望は、とても美しい。紀伊半島はツチノコのメッカと言われるほどに目撃情報が多く、作家の田辺聖子氏もツチノコ探しに紀伊半島に通ったという。

その他では、下山路の日裏の竹やぶには「藪お化け」がすんでいて、夜に人が通ると前に立ちふさがったり後ろから尻をなでたりするという。虎ヶ峰にはノーツチという化け物がいて、長さ5尺、太さ1尺の大蛇で、山の上の方から転がってきて人や動物の血を吸うという。いわゆるツチノコで、みなべ側でも出たようだ。このように、龍神には数多くの怪異話が残されており、神秘的な場所だといえよう。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。